

読書のすゝめ

その 27

H 28

9 / 20

季節の移り変わり

秋の七草

秋の七草は山上憶良が万葉集で詠んでいる次の二首が由来とされています。



*秋の野に咲きたる花を 指折り かき数ふれば 七種の花 (巻八 1537)
*秋の花 尾花 葛花 瞿麦 (なでしこ)の花 姫部志 (をみなへし) また藤袴 朝顔の花 (巻八 1538)



朝顔の花あさがおが何を指すかについては、朝顔、木槿(むくげ)、桔梗、昼顔など諸説あるが、桔梗とする説が最も有力です。春の七種と違い、秋の七草に直接何かをする行事はありません。秋の野の花が咲き乱れる野原を「花野」(はなの)とい、花野を散策して短歌や俳句を詠むことが古来より行われていたようです。

映画化される作品から

大崎善生



『聖(さとし)の青春』 大崎善生 (講談社)

かつて将棋界で「東の羽生・西の村山」と羽生善治と並び称された天才がいました。それが村山聖です。難病ネフローゼを患い病に苛まれ続けた人生は、わずか29年、志半ばで終わってしまいました。将棋界の最高峰A級に在籍したままの逝去。
ただひたすらに「名人」になることを夢に見て、苦しみながらも着実に一歩ずつ階段を上っていく。病気を言い訳にせず、思うに任せない状況の中で力強く駆け抜けた彼の生涯に、純粹に生きるということの尊さを感じます。師弟愛、家族愛、ライバルたちとの友情。将棋を知らない者にも彼の生き方は胸にせまる。

『永い言い訳』 西川美和 (文藝春秋)

長年連れ添った妻・夏子を突然のバス事故で失った、人気作家の津村啓。悲しさを“演じる”ことしかできなかった津村は、同じ事故で母親を失った一家と出会い、はじめて夏子と向き合い始めるが…。突然家族を失った者たちは、どのように人生を取り戻すのか。人間の関係の幸福と不確かさを描いた物語。



【著者から】

「人間同士の関係性は綺麗な形ばかりではなく、後味の悪い別れ方をしたまま相手が帰らぬ人になってしまったという不幸も、あの突然の災厄(3・11)の下には少なからず存在したのではないかと。そしてそういう「暗い別れ」は誰にも明かされず、打ちあけられないままに埋もれていったのではないかと。私自身が普段、身近な人に対してぞんざいな態度のまま別れるということも多いためそう思ったところもあるのかもしれない。それで私は、大きな悲しみの物語が大声で語られている下で封じ込められた、誰にも言えないような別れ方をした人の話を書いてみようと思っただけです。」

※ぜひ原作を「読んで」みてください！